多彩でおしゃれなブラジルの俳句文化

――日本文化への憧憬と新展開――

久冨木原　玲

今年、二〇二三年の秋、東京・北青山のブラジル大使館で話をする機会を戴いた。ブラジルの研究仲間、ホベルソン教授が来日して、ふたりで「詩歌でつなぐ日伯の道」（「伯」はブラジルの意）というタイトルで講演をしたのである。

ホベルソン教授は日本の俳句をパフォーマンス、つまり身体によって表現するというユニークな活動を含めた研究をしている。しかも彼のパフォーマンスは都市の路上を舞台として音楽も交えつつ与謝蕪村の一句を演じるのである。その実践について彼は「俳句の再発明」と題して話をした。私はブラジルには多様でおしゃれな俳句文化があり、世界を見渡してみても独特な魅力にあふれているということを報告した。

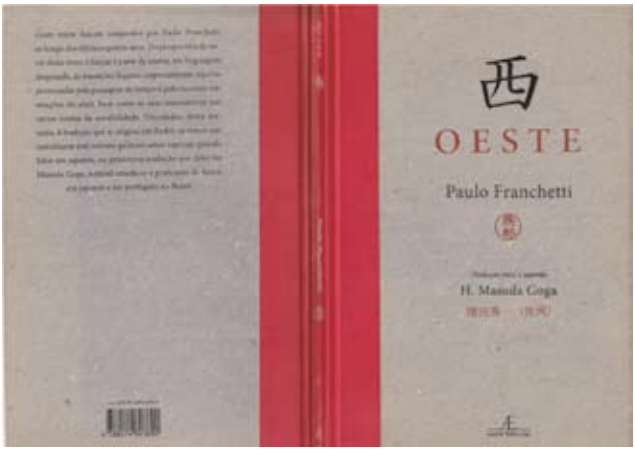
ブラジルは俳句が盛んだ。七年前にサンパウロ大学客員教授として三か月近く滞在した際に、そのことを知った。日本語俳句だけでなく、フランス経由で入ったポルトガル語ハイクもあり、さらに日本の俳句に倣って季語と五七五シラブルを取り入れたポルトガル語ハイクもある（画像①）。さらにホベルソン教授のように俳句を演劇仕立てで表現する試みもある。

私はブラジルに、これほど多彩な俳句文化が花開き共存することに興味を抱き、帰国後に少しずつ日本に紹介するようになった。それが高じて本格的に研究してみようと思い立って日本学術振興会の科学研究費に申請して採択された。けれども、なかなか現地調査に赴く機会が得られず、この夏、ようやく渡航が叶った。そこでサンパウロ及びアマゾンでの調査に加え、少し欲張ってリオデジャネイロの国際学会で研究発表も行なってきた。

調査の際に会ったブラジル人俳人、ダニタ・コトリムさ

多彩でおしゃれなブラジルの俳句文化

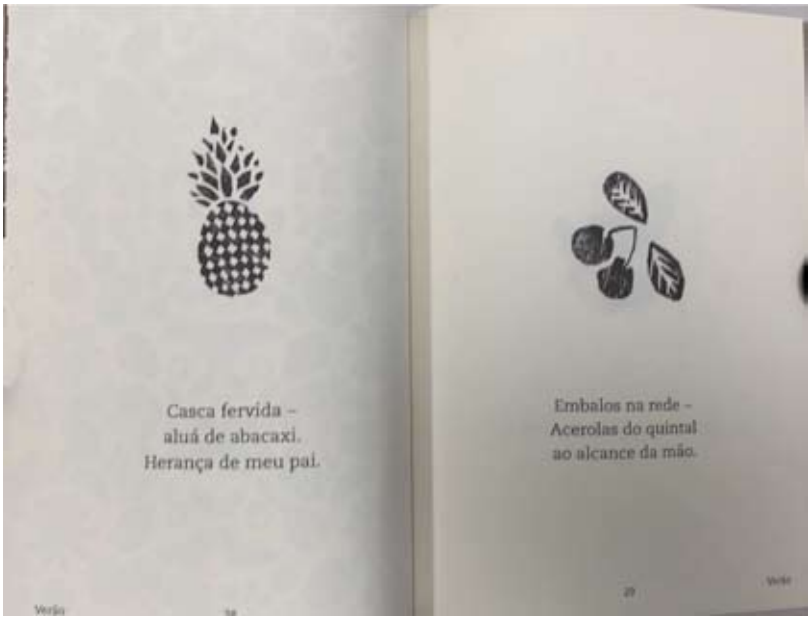
画像①
パウロ・フランケッティの句集『西　OESTE』2008 年



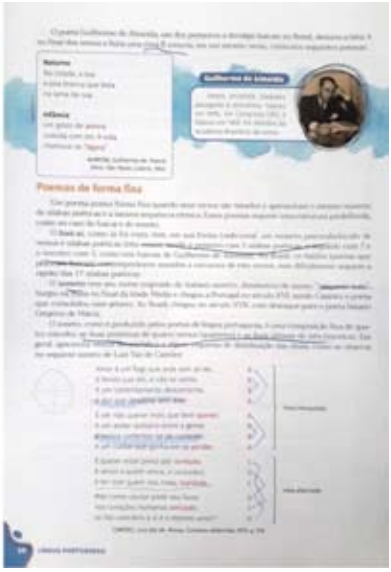
ポルトガル語ハイクに日系人の増田恒河が日本語訳をつけたもの。増田は季語と五七五シラブルをとり入れたポルトガル語ハイク運動を展開し、ハイク実作者及び研究者として活躍したフランケッティとも親交があった。

画像②
ダニタ・コトリムの句集

『青空市場ー季節の果物・野菜を詠んだ
有季ハイカイ』2016 年
（作者は恒河が始めた運動を受け継ぎ、
現在はその代表者として活躍中）



画像③
中学校の教科書に載る芭蕉像



画像④
句集『百枚の花びらの菊』（1985 年刊）の俳画と俳句

んが話してくれたが、十歳の頃、日本の俳句に接する機会があり、興味を持つようになったそうだ（画像②は彼女の句集の表紙と内容の一部）。実際、ブラジルの中学校教科書には日本の俳句を紹介する頁があり、そこには芭蕉を描いた絵なども掲載されている（画像③）。もちろんそれらはポルトガル語に翻訳されているのだが、ブラジルで俳句はスタンダードな教育内容のひとつになっているのである。

学校教育については忘れられないことがある。七年前のブラジル滞在時にサンパウロ大学の大学院生が「中学生が芭蕉の句をイメージして作曲しました。」と言って、スマートフォンから流れる曲を聴かせてくれたことがあった。それは短いけれど洗練されていて心地よく、私はすぐに「『閑かさや岩にしみいる蝉の声』でしょう。」と応じることができた。句の趣が実によく表現されていたからだ。その中学校では芭蕉の俳句を教わると、生徒たちはその印象をもとに絵を描き、曲を作るのだそうだ。これほどセンスの良い曲を中学生が?と驚いて、見学させてもらったところ、国語と音楽の先生たちの連携による教育プロジェクトの成果のひとつだということであった。

その学校は日系人が経営する私立学校だった。公立学校でもこのような教育がなされているのかどうかわからないが、五感を働かせてゆたかな表現力を養うプロジェクトに感嘆した。このような教育と前掲のホベルソン教授の俳句パフォーマンスとの間には、それほど大きな階梯はない。

ブラジル人による俳句の受容とその表現は、このように実に魅力的で、そこには日本に対するリスペクトを感じる。先ほど紹介したダニタ・コトリムさんは、季語等、日本俳句の要件を取り入れたポルトガル語俳句を詠んでいるが、彼女の句集には一句ごとに版画のような画が付され、装丁も含めてまるで美術作品のように洗練されている。しかもそれは和綴じ本なのである（画像②）。

またアマゾン川中流の大都市マナウスで出会った『百枚の花びらの菊』というポルトガル語の句集も、百句すべてにおしゃれな水墨画風の画が捕かれている（画像④）。葉書大のカードに句と画が配され、木製の箱に収められているが、綴じられておらず、一枚ずつ手に取って鑑賞できるようになっている。実に凝った独創的なつくりであり、また「百枚の花びらの菊」というタイトルと水墨画風の俳画には日本が意識されている。この外、芭蕉その人に対する尊敬と親しみを込めた作品もある。このたび私がブラジル大使館で講演した際に最も反響が大きかったのは、この芭蕉をリスペクトする俳句・俳画を紹介した時であった。あいち国文の会のみなさまにも、これらの作品をご覧戴いて、共に楽しめたらと願っている。

（くふきはら　れい）